

## ヤーコブ・ファン・リースフェルトの聖書

—宗教改革期アントウェルペンにおけるテキスト、イメージ、印刷物

石田友里 (京都大学)

---

1545年、印刷・出版業が最盛期を迎えた国際商業都市アントウェルペンで、ルター派聖書を出版していた印刷業者ヤーコブ・ファン・リースフェルトが、異端判決を受け処刑された。1526年に初のオランダ語訳聖書を出版したリースフェルトは、宗教改革期に新教普及のため俗語聖書を多数出版し、信仰を貫いた「神の言葉の殉教者」とみなされてきた。しかし、近年の研究では、彼自身の信仰に関する歴史的根拠の希薄さから、この従来解釈が揺らいでいる。では、いったいなぜリースフェルトは聖書の印刷を続け、処刑されたのだろうか。

本発表は、リースフェルトの処刑について、彼の聖書のテキストと版面挿絵などのイメージに注目し、当時の社会的背景をふまえて考察を行うものである。人々の神学的知識の土台となった聖書のテキストとイメージは、必ずしも印刷業者の個人的信条の表明ではなく、宗教改革期に印刷物が果たした役割を映し出していることが明らかになるだろう。

まず、同時代の聖書との比較から、リースフェルトの聖書の特徴を明らかにする。リースフェルトは、その生涯で19もの版の聖書を出版している。最も有名な1526年版の聖書では、タイトルページの版面に聖書から6つの引用が書き込まれ、「神の言葉」の重要性が強調されている。また、その挿絵はドイツの宗教改革者ルターの聖書(1523年、ヴィッテンベルク)を手本としていることが分かる。処刑の数年前に出版された1542年版の聖書は、ルターの教えに依拠する欄外注など、改革派の教えを明らかに示している。一方で、リースフェルトの出版業績には、カトリックの教書・ビラも認められる。これにより、改革派の理念を示す聖書の刊行は、購買層の需要増加といった社会的要求を契機としていたと考えられる。

次に、リースフェルトの裁判の経緯を検討する。アントウェルペン市の公文書に残されている裁判記録から、彼が1545年5月に異端として糾弾され、11月に処刑されたことが分かる。同業者アドリアン・ファン・ベルゲンも、検閲に抵抗したかどで1542年に処刑されている。この際には、禁書となった彼の印刷物を体につけ処刑台で晒すなど、見せしめとしての性格が明らかな処刑方法が提案されている。さらに、同市を支配下に置いていた神聖ローマ皇帝の勅令などから、印刷物検閲の義務化から禁書所持者への体罰・死刑まで、年代ごとに異端への対応の変化が確認できる。このことから、リースフェルトの処刑が行われたのは、情報伝達媒体として当時大きな役割を果たしていた印刷物の取締りが強化された時期だったことが分かる。

以上のことから、規制が厳重になった時代、リースフェルトの聖書はその内容から異端視を免れ得ず、彼の処刑には社会的な見せしめの効果が期待されていたと考えられる。本発表を通じて、当時の印刷物のテキストとイメージから読み取れる新たな解釈を提示したい。